佐渡を世界遺産に

目指せ！世界遺産登録！！「佐渡島の金山」

能

巴

天領佐渡両津薪能

令和四年六月四日（土）開演　十九時三十分

佐渡市原黒・椎崎諏訪神社能舞台

※　雨天の場合は、会場を金井能楽堂に変更することがあります

主催　天領佐渡両津薪能実行委員会

アースセレブレーション実行委員会

佐渡市

後援　佐渡汽船株式会社

「佐　渡　宝　生」

能楽五流のひとつ、宝生流は、加賀宝生をはじめ、南部宝生、会津宝生、佐渡宝生など江戸時代からの流れが根強く今日に受け継がれています。

慶長九年（1604）、佐渡奉行となった大久保長安が佐渡に猿楽師を同行したことから佐渡における能楽が始まりました。常太夫、杢太夫を中心に、おそらく観世座が生まれ、相川の春日社で神事能が催され、その後次第に国中から島内各地に広まっていきました。両太夫の絶家後は潟上の本間太夫がこれに代わって佐渡能楽の中心になっていきます。

本間家初代となる本間秀信は、江戸の宝生太夫の門を叩き教えを受け、寛永十八年（1642）に佐渡に帰ります。慶安四年（1651）、佐渡奉行から正式に宝生の能太夫を拝命し、さらに翌年には宝生宗家より能太夫の世襲を認められます。ここに「佐渡宝生」の礎が築かれることとなりました。本間太夫は代々宝生宗家の教えを受け、佐渡に正統の宝生流を伝えてきました。

加賀には「謡が二階から降ってくる」という言葉がありその盛んな様を伝えています。一方佐渡にはこんな言葉もあります。「舞い倒す」。能舞が高じて身上を潰すというものですが、それは修行を積んで正統な宝生の能を舞おうとする「佐渡宝生」の本質を内包する言葉であると言えます。

能解説　能楽研究家　齋藤 達也

火入れ式

前シテ（里女）
後シテ（巴）　齋藤美千枝

巴

ワキ（旅僧）土屋 晴夫

大鼓 佐々木浩一
小鼓 牧野 恒良
笛 木内 豊

間（所の者）湯田 拓也

後見 金井 雄資
金井 賢郎
永田 治人

地謡 齋藤 貴史 曽我 長治
笹川 通博 齋藤 達也
佐々木雅文 神主 弐二
神主 和人 田辺 進二
石田 信康 石平 伸一

附祝言

（終演予定 二十時五十分頃）

巴（ともえ）解説

舞台は近江の国（滋賀県）の琵琶湖畔。都を目指し木曽山中から旅をしてきた僧は、粟津の松原に着く。そこに一人の里女が現れ、小さな祠に向かい涙を流しながらお参りする姿を目にする。不審に思い問いかけると、昔、行教上人が宇佐八幡宮に参拝したときに詠んだ歌「何事のおはしますとは知らねども忝（かたじけな）さに涙こぼるる」を引き、神前で涙することに何の不思議もないと答え、ここはあなたと同郷の木曽義仲を神として祀る場所だから、その御霊（みたま）を慰めてほしい、自分も実は亡者なのだと言い残して、夕暮れの草蔭に消え失せた。

僧は里の男に義仲の最期と巴御前の話を聞き、懇ろに弔っていると、長刀を持った女武者姿の巴御前の霊が現れ、義仲の死出の旅にお供ができなかった無念さゆえに成仏できないでいると僧に告げる。そして主君義仲の最期の有様と、巴自身の奮戦振りをも再現して見せ、ついには義仲に命じられた通り、涙ながらに木曽に落ち延びることになったわが執心も弔ってほしいと、僧に願うのであった。

修羅物のなかで唯一の、女がシテの能。巴は「色白く髪長く、容顔まことにすぐれた」美女で、「打ち物持っては鬼にも神にも」相手をしようというほどの一騎当千の兵（つわもの）でもあったと『平家物語』の「木曽最期」に見える。主君への恋慕の情、君臣の哀切な別離の情景を描き、朝日将軍・木曽義仲の悲運の死に手向けられた一輪の花のごとき名曲である。